
リノ・バンの世界の物語

有間優魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リノ・バンの世界の物語

【Nコード】

N6369J

【作者名】

有間優魔

【あらすじ】

この小説は、他の世界を覗くことができる世界で暮らす異能力者のお話です。

試験結果発表（前書き）

へたくそです。おかしい点は順次直していきますのでご指導よろしくです> ((<

試験結果発表

僕、リノ・バンの住んでいる世界は変わっている。

なぜ変わっているか判断できるかというと、他の世界を覗くことが出来るからだ。

まあ、覗くといっても空を飛んでる飛龍から町を見るようにしか見ることが出来ないんだけどね。

だから僕の世界の文明はそこまで発達していないのだろう、飛龍より大きい白いからくりが何体もの緑のからくりや青のからくりを銃で撃ち抜き、切り裂いたり。何人もの人が黒い服を着て円陣を組み模様を書きその模様の真ん中で人を殺し、魔物を呼び出したり・・・そういうことは、真似したけどみな無理だった。

だからここには、見た世界を記し、保管しているだけ。

今後の自分たちの生活に役立つかもしれないと思って・・・今日も・・・

3

世界のことはいい？僕のこと？

僕はA Aランクの異能力者だ。

能力者と異能力者の違いは分るかい？

簡単に言えば、自分の能力と同じような能力を持つ人が居なかったら異能力者だ。

もちろん異能力者といわれていた人が能力者に格下げされたケースもある。

そうだな、例えるなら“人や動物を生き返すことが出来る能力”^{リボーン}だ。最初は2人しか居なかったが、今では世界各国に居る。

そういえば、まだ言っていなかったよね？

僕の能力は“イレイザ”。消すという意味らしい。

能力者保護団体(Group that protects persons)、皆はここから仕事や医療、買い物などが

出来ることからギルドと呼んでいる。

今日は一月前に受けた試験の結果発表日で、これを高得点で合格すればSランクになれる。Sランクは、ギルドの中にチームを作れる。“精空の騎士”というチームなんて子供の能力者のヒーローみたいなチームだ。

まあ、昔は創立者の名前を取った“ガル・レオのチーム”という名前だったんだけどね。

でも、Sランクに成れなくても十分に目標は達成できるんだ。

AAAランクで弟子を取れる。今、一人勝手に付いて来てる子を連れ歩く理由が出来ればいいんだ。

何故って？そりゃあ、自分が通った関所で毎回一悶着されたらオレの風評が落ちるからだ。

そんな事はいいい、さっさと結果を話せ！だって？
いいよ

今、張り出されたところだ。

右上からFランク・Eランク・Dランク・・・という順番で張り出されている。

AAAに僕の名前は無し・・・Sランクにも無い！？

「おお！リノ、すごいです」

ついでにこいつが例の奴、ルル・エリだ。

「SSランクに一人合格ですよ！」

ついでにオレは今、ルルを肩車している。

なぜって？もちろん人が多すぎて下のほうが見えないからだ。

2時の方向を見てみる空飛びながら見てるせいで周りから怒られてる奴も居るだろ？

まだこれくらいでは怒られないのだ。

カラカラン

『合格者は大聖堂に番号順で並んでください。番号は合格者表の左

側に記載されているのがそうです。見えない人は係員までお尋ねく
ださい。繰り返します・・・』

「だそうですよ？」

一寸待て！最後じゃないか！！

試験結果発表（後書き）

作者はこれが2つ目の作品ですが1つ目を終わらせていません。つまりまだまだ初心者です。指摘をしていただけるとうれしいです

特別任務（前書き）

真冬だけどアイスを食べた。
お腹を壊した。
情けない・・・

特別任務

「次ぎ、Dランクに移ります。054番 セレ・ナレ前へ」

授章式は刻々と過ぎて行きそして

「次ぎ、112番 エリ・ルル前へ」

（ルルの番か・・・あれ？）

「エリ・ルル。貴方をBランク異能力者として認める
認定証を受け取るやいなや。

「ありがとう」

そう言って飛び跳ねながら外へ向かっていった。

（あいつは確か試験日の2日前から入院してたよな？面会謝絶にな
ってたし・・・）

リノがそんなことを考えている間も式は進み・・・

「おい、お前！SSランクに合格したのが嬉しくて舞い上がる気持
ちも分るが、前に進め！」

（おっと！管理委員に怒られちゃったか・・・って、本当にいかん
！）

リノの前には大男が十人は入ることの出来る隙間が出来ていた。

（まあ、後で聞けばいいか・・・）

そして時は過ぎ

「次、SSランクに移ります。157番 リノ・バン」

「はい」

五段しかない階段を登り表彰台の上に立つと

「リノ・バン。貴方をSSランク異能力者として認める。なお貴方
には同時に、審議会の審議の結果、スカレット大国の姫、ルナ・
ハンの護衛の任を任された事を知らせる。」

（あれ？それってここで言っているの？）

「はい、おめでとう」

「あ、どうも・・・」

SSランク証明書と特別任務報告書が重ねて手渡された。
そして、最後の表彰者リノが表彰式場を出るのを見とどけて式は終了した。

レノがカフェで特別任務報告書を見ているとルルが聞いた

「リノ、スカーレットに行くの？」

「ああ、僕はもうSSランクだからね」

「SSランクだから？」

ルルは不思議そうに聞いた

「うん、あまり知られてないけど特別任務って言うのは機密任務のことなんだ。そして、Sランクは断ることが出来るけどSS・SS・S・Mランクの人は基本的に断ることが出来ない。」

「じゃあ、Sランクが一番いいじゃん」

「そうでもない。Sランクは、断れる代わりに任務に必要な装備や道具を自腹で用意しなくてはならないんだ。だからSランクの人たちは、チームを作って少ないそれに挑む。」

「へえ〜」

「へえ〜、じゃない。今回は、お前も含む3人で行くんだからな。」

「3人？あと一人は？」

「今連絡を待っているとこらだ。」

それから連絡を待つこと30分後、人が来た。突然何もないところから現れたのだ。

「本部でヤマ・シロさんお待ちです。私が“テレポート”でお連れします。」

いきなり出現した女性はそう言うと言刺を差し出した。

名刺を受け取って「お願いします。」とリノは現れた女性ときえてしまった。

「え？私は？」

ルルの声は誰にも届かなかった。

特別任務（後書き）

うう、ネタはあるのに文字に出来ない・・・○（´＾｀）○
もう少しきちんと授業聞けばよかった（＊／□／＊）

スカーレット天国に向かうまで（前書き）

書きたいことを全部書くと話が長くなりすぎたのでズバズバ省略しました。省略した話はあとから分るようになります。

スカーレット大国に向かうまで

リノは連れてきてくれた女性のMy Pointで彼女の名刺を見ていた

「能力者保護団体認定商会 G^{ゲート}A^{ポイント}T^{ランク}E A ポン・タ
ンか・・・」

リノが見ていた名刺をしまうとほぼ同時にポンがMy Pointに入ってきた。

「では、こちらへ」

ポンがそう言うとりノはポンの後に続いて部屋を出た。

その頃、ルルは・・・

「ふん！ いいもん、一足先に目的地に行くんだから！」

会計時に店の店員に向けて言うところルルは全力でスカーレット大国に走り出した。

ヤマ・シロとの会話とギルドでのチーム申請と任務の説明が終わり。
(さて、ルルを迎えに行くか)

などと考えていると昔世話になった情報屋が声をかけてきた。

「ちよっといいかい？ 銅貨5枚でこの情報はいらんか？」

「銅貨5枚？」

情報屋はものすごく金を取る。一般人が情報を買う時があるとすれば、人生の大博打をする時ぐらいだ。

そうだな、例えば名も無き普通の家族の子供が誘拐されたでしょう。情報屋がその子の居場所をその両親にいくらで売ると思う？ まあ、ピンからキリまであるけど平均するとだいたい金貨3000枚位だな。一般人の年間平均給料は、能力者で金貨54枚、無能力者で金

貨38・4枚だ。

どう、高いでしょ？だから「何でそんなに安いの？」って聞こうと思ったんだ。でも僕が聞く前に勝手に情報を見せ始めた。

内容？

ルルがスカーレット大国のお城の門番に「リノが来るまでここを動かない！」と言って座り込んでいる映像だ。

「どうだい？見えたかい？」

「ああ、くっきりと！」

そう言う僕は銀貨を一枚渡して大国に急いだ。情報屋の顔がいつもと違ったのが、ルルのことを笑っているのを必死に隠そうとした結果だったと知ったのは次に世話になったときだった。

急いでGATEの係員に「待ってもらっていたヤマと彼女の弟子のジョ・ジョと一緒にスカーレット大国の城につれてきてくれ」と頼みGATEを出た。

僕が向かった先はルルと出会う前に貸しを作っておいたフォンの元だった。

「フォン！フォンはいないか？」

バーテンダーにそう聞くとバーテンダーはトイレの右の扉を指差した。

僕は急いでその扉まで行き扉を殴るように開けた。

「フォン！」

「はいはい、聞こえているよ」

鬱陶しそうにフォンは答えた。

「スカーレット大国の」

「ルルの場所だろ？さっき情報屋に教えたのは俺だからな……値段安かったろ？」

「ああ、そうかお前が…なぜ？」

「さあな、準備は出来てるぞ」

「むう……頼む」

何故ルルの事を知っていたのかを知りたかったが大国に向かうことにした。

彼は（強く願った場所に飛ばす）という能力を持っている。G A T Eで城に向かうために必要な時間は待ち時間を含め1時間程度だ（転送には時間がかからないので待ち時間のみと言っても過言ではない）。それに彼ならG A T Eからルルの場所に向かう時間も短縮できるのだ。

「ではいくぞ」

その声を聞いたと同時に彼の能力は発動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6369j/>

リノ・バンの世界の物語

2010年10月9日07時56分発行